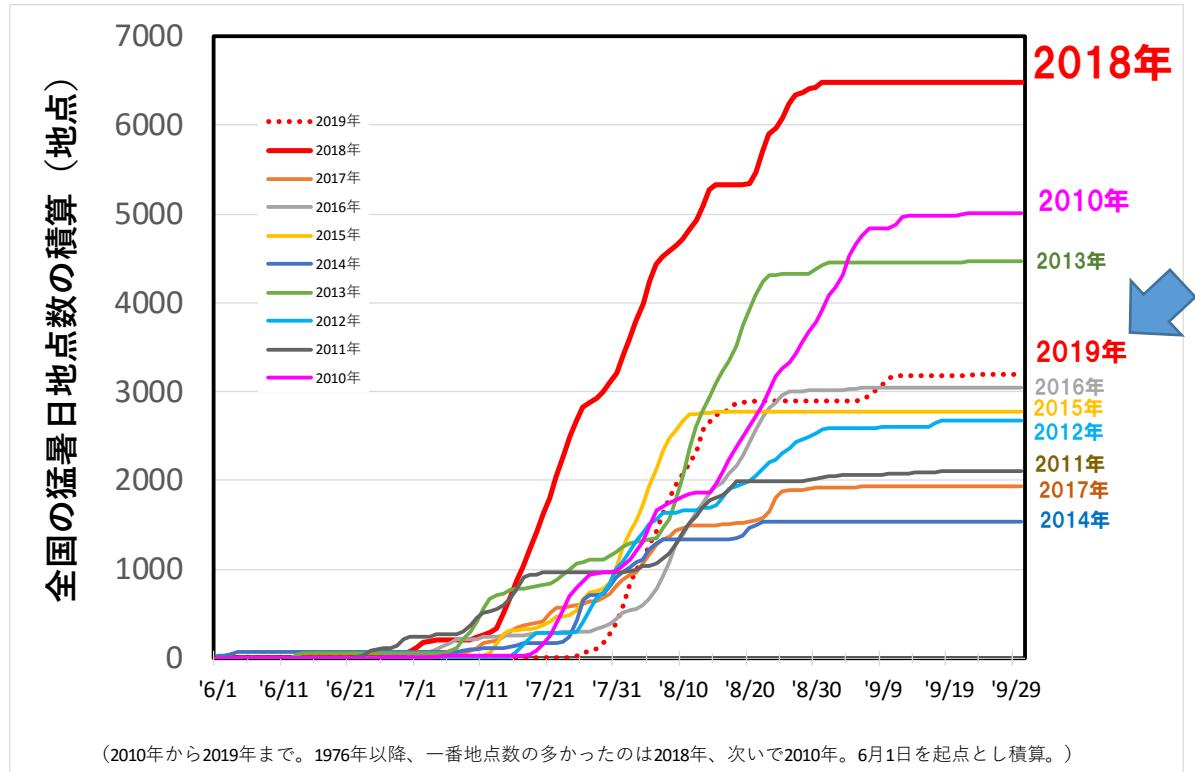


第15回中国地域エネルギー・温暖化対策推進会議 資料
(令和元年11月19日 大阪管区気象台)

業務体制変更があり、広島地方気象台に代わり、大阪管区気象台が今年から出席することとなりました。

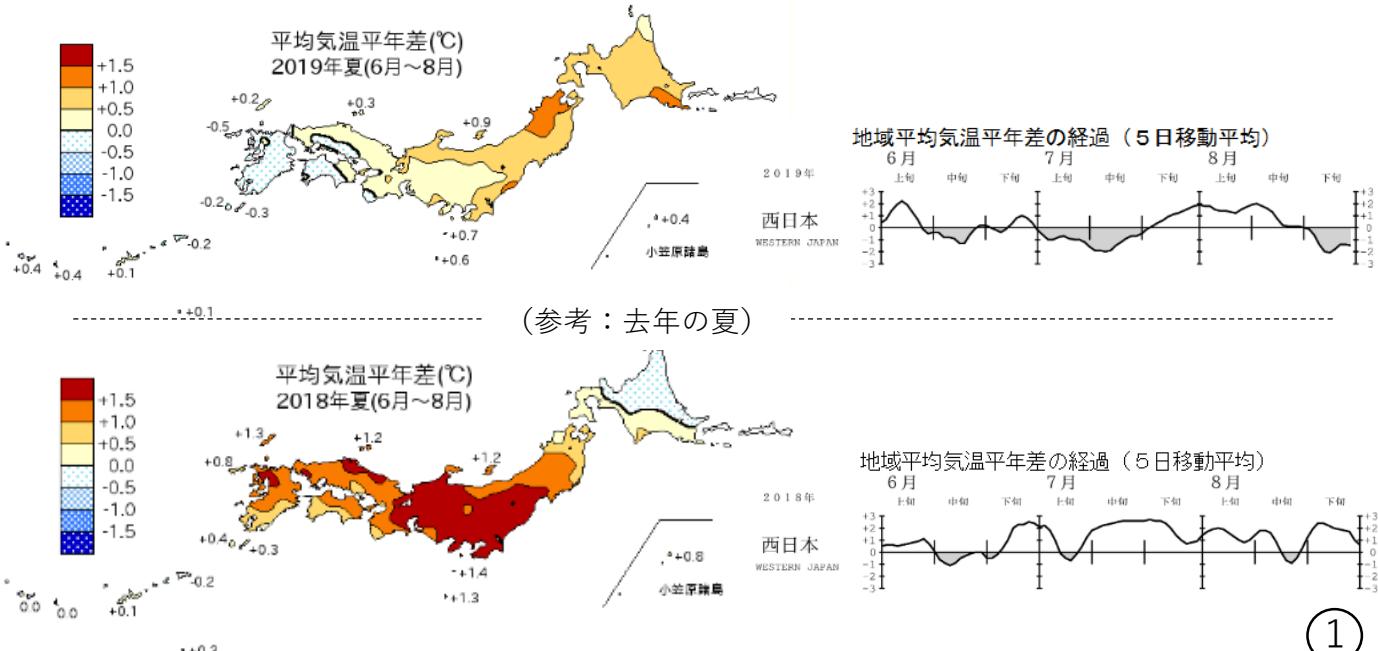
【1】日本の気温（2019年の夏）

2019年の全国のアメダスの猛暑日（日最高気温が35°C以上）の積算地点数は、2018年の約半分で、2010年以降の10年間では4番目の多さでした。



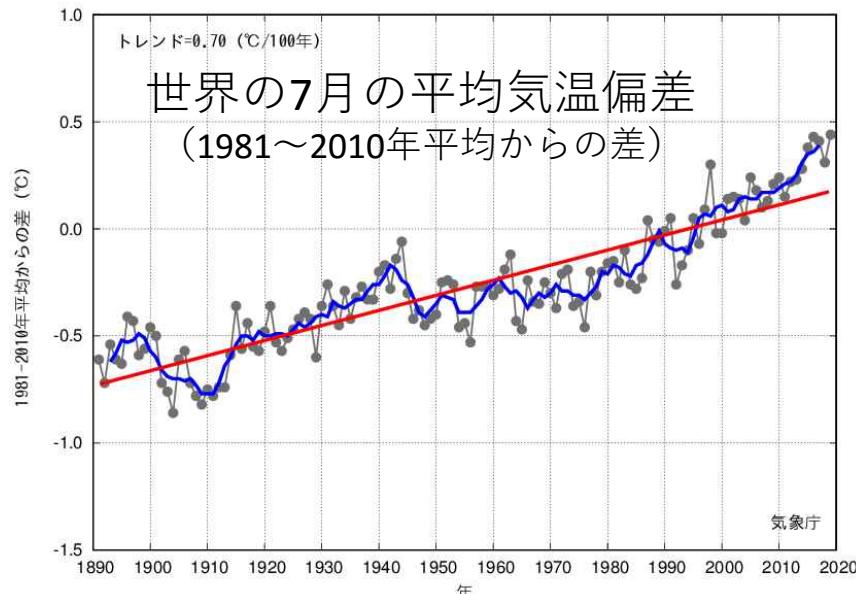
(2010年から2019年まで。1976年以降、一番地点数の多かったのは2018年、次いで2010年。6月1日を起点とし積算。)

西日本の2019年の夏（6～8月）の平均気温は、平年並みでした。平年：1981～2010年の平均



【2】世界の気温（2019年の夏）

世界の7月平均気温偏差



2019年の月毎の平均気温は、

1891年の統計開始以降、

- ・6月として最も高い値

- ・7月として最も高い値

- ・8月として3番目に高い値

- ・9月として2番目に高い値

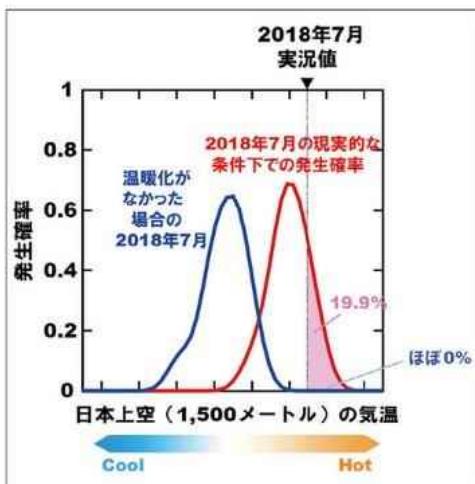
【3】地球温暖化と極端現象の関り（研究事例）

気象業務はいま 20019 より

平成30年7月の猛暑

平成30年7月の猛暑についてコンピューターシミュレーションを行い、産業革命以降の地球温暖化が起らなかったと仮定した世界では、その発生確率がほぼ0%となり、人間活動による地球温暖化がなければこのような猛暑は起こり得なかつたことが示された。

平成30年7月の気温の発生確率

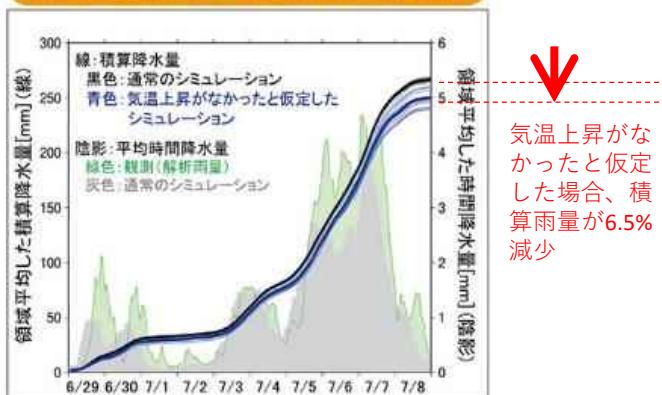


平成30年7月の日本域上空1500メートル付近の気温の確率密度分布。赤線は現実の条件下におけるモデル実験、青線は地球温暖化が起らなかつた想定でのモデル実験。

平成30年7月豪雨

平成30年7月豪雨についても、コンピュータを使って地球温暖化の影響を評価した。まず、現在の気候状態で今回の豪雨を再現すると、実際の雨量（緑）よりやや少なめだが、大雨のタイミングをよく再現できた（灰）。次に、近年の気温上昇がなかったと仮定し、降水量の積算を計算すると、気温上昇がない仮定の場合では6.5%程度降水量が減少した。

東日本と西日本で平均した降水量の時間変化



東経129～142度、北緯30～37.5度の陸上で平均した積算降水量（線）と1時間降水量（陰影）の時間変化。黒線は通常のシミュレーション、青線は気温上昇がなかったと仮定したシミュレーション。細線は設定を微調整した20個の計算、太線はその平均。緑陰影は観測、灰陰影が通常のシミュレーションの1時間降水量。